

## 「真夏の夜の夢」の外題について

中 村 六 男\*

Mutsuo NAKAMURA : On the Title of *A Midsummer-Night's Dream*

Shakespeare の *A Midsummer-Night's Dream* という戯曲の外題は「夏至の夜の夢」、「真夏の夜の夢」或は「夏の夜の夢」と種々日本語に訳されている。この事はこの戯曲の title に関しては問題を蔵していることを示すものと云うことが出来よう。そこでこの問題を少しく論じて見たいと思う。

この劇の内容とする時間をまづ考えてみなければならぬが、Daniel の計算に依つたと思われる市河三喜博士の説では、Day 1. Act I; Day 2. Acts II., III., and part of sc. i. Act IV; Day 3. part of sc. i. Act IV, sc. ii. Act IV., and Act V. の三日間にわたつて事件が進行されるとある。即ちこの劇の内容とするところは一夜に起つた事件ではない。夏至の夜は一夜であつて三晩もあるのではないのであるから、この夢は夏至の一夜に起つた事件を扱つて居るのではないことになる。更にこの戯曲の冒頭に、

*The.* Now, fair Hippolyta, our nuptial hour  
Draws on apace; four happy days bring in  
Another moon: but, O, methinks, how slow  
This old moon wanes! she lingers my desires,  
Like to a step-dame or a dowager,  
Long withering out a young man's revenue.

とあり、これに答えて、

*Hip.* Four days will quickly steep themselves in  
night;  
Four nights will quickly dream away the time;  
And the moon, like to a silver bow  
New-bent in heaven, shall behold the night  
Of our solemnities.

とあり、この劇の終る四日前の夜に Theseus と Hippolyta とが対話をしている所からこの戯曲は始つている。この点前述の計算とは多少異なるが、やはり夏至の一夜の事件でないことを示している。然らばこの戯曲の内容とする所は一年の何月頃のことであらうか。Shakespeare 時代は旧暦 (Old Style) たる Julian calen-

dar 即ち太陰暦が使われていた (英国で新暦 (New Style) たる Gregorian calendar が採用されたのは 1752 年であつた)、其故に月の変化に依つて月 (グツ) を算え、from one New moon to next moon であり a month であつた。上にあげた引用は四晩過ぎると新しい月になり、結婚が行われることを述べているのであるが、それは何月であらうか。

Theseus は Lysander, Demetrius, Helena, Hermia の四人が森の中で眠つて居るのを見て、

*The.* No doubt they rose up early to observe  
The rite of May, and, hearing our intent,  
Came here in grace of our solemnity.  
But speak, Egeus; is not this the day  
That Hermia should give answer of her choice?  
(IV, i, 136-140)

と Egeus に云つて居る。この言葉よりこの朝は五月一日の朝たることは明瞭である。そうすると、

*The.* Take time to pause, and, by the next new  
moon—

The sealing-day betwixt my love and me,  
For everlasting bond of fellowship—  
Upon that day either prepare to die  
For disobedience to your father's will  
Or else to wed Demetrius, as he would;  
Or on Diana's altar to protest  
For aye austerity and single life. (I, i, 83-90)

と云うこの劇の初めの所で Theseus が Hermia に対してその父の Egeus の云う通りになるかならぬかの返答をなすべき期限の日は五月一日と云うことになり、最初にあげられた引用からして、この劇は五月一日より四日前に始まり、Theseus と Hippolyta との結婚式の挙げられる五月一日の晩に終つて居ることが解る。更に五月一日を証明するものとして、

*The.* Go, one of you, find out the forester;  
For now our observation is perform'd;  
And since we have the vaward of the day,

\* 信州大学繊維学部 英語研究室

My love shall hear the music of my hounds.  
Uncouple in the western valley; let them go:  
Dispatch, I say, and find the forester.

[Exit an Attendant.]

We will, fair queen, up to the mountain's top  
And mark the musical confusion  
Of hounds and echo in conjunction. (IV, i, 107—115)

を引用することが出来る。勿論五月と云つても旧暦の五月であり、又この劇の場面は Athens, and a wood near it とあつてギリシャとなつて居るが、その実は当時の英国を表わしていることは今更云うまでもない。

所がこの劇の Interlude をなしている部分に登場する銜掛屋の Snout と大工の Quince と織物屋の Bottom 等の言葉を聞くと、

Quin. Well, it shall be so. But there is two hard things; that is, to bring the moonlight into a chamber; for you know, Pyramus and Thisby meet by moonlight.

Snout. Doth the moon shine that night we play our play?

Bot. A calendar, a calendar! look in the almanac; find out moonshine, find out moonshine!

Quin. Yes, it doth shine that night.

Bot. Why, then may you leave a casement of the great chamber window, where we play, open, and the moon may shine in at the casement.

Quin. Ay; or else one must come in with a bush of thorns and a lanthorn, and say he comes to disfigure, or to present, the person of moonshine.

(III, i, 48—62)

とあり、結婚式のお祝いの催物としてこの Interlude の演ぜられる夜は曆に依ると月が照ることになつている。換言すると五月一日の夜は月光が窓を通して広間に射込むことになり(しかし月光の役を演ずる者が登場するので、そうとばかり云えないかも知れない)、この劇の冒頭の Hippolyta の言葉にある a silver bow の様な新月の感じとは相調和しなくなる。更にこの劇に現われる妖精の女王である Titania の言葉に、

Tita. Come, wait upon him; lead him to my bower.  
The moon methinks looks with a watery eye;  
And when she weeps, weeps every little flower,  
Lamenting some enforced chastity.

(III, i, 201—205)

とあり、月が a watery eye をしているとは Deighton に依ると、the watery look of the moon, caused by vapours hanging round it, indicates rainy weather. と云うことであつて、月が空中の湿気のために朦朧として曇をかむつた状態と思われる。其故に新月の弓張月とは大変異つた感じである。この劇に現われる妖精達は月と非常に関係があり、常に月の後を追つているのであるから夕方ちよつと現われて間もなく西方に没する新月ではどうしてもいささか矛盾を感じざるを得ない。併し Chaucer の Canterbury Tales の Prologue にもある通り四月は時雨れる季節であるのだから四月の終りから五月の朔日にわたつて起つた事柄をこの戯曲は扱つて居ると見做すのが以上挙げた諸引用から見ても正しいと思う。其故に夏至の一夜の出来事を扱つて居るのではないという結論になる。

さて此処ですこしく May-day にまつわる rites and customs やこの戯曲の sources からこの問題を検討してみよう。既に引用例の中にも the rite of May とか observation とか云う May-day に関する言葉があるが Lysander と Hermia とが駈落をして Athens の蕪の或る場所で落合おうと約束する箇所に、

Lys. ....If thou lovest me then,  
Steal forth the father's house to-morrow night;  
And in the wood, a league without the town,  
Where I did meet thee once with Helena,  
To do observance to a morn of May,  
There will I stay for thee. (I, i, 163—168)

と To do observance to a morn of May と云う言葉があり、更に4幕2場296行に Hermia が Helena を罵る言葉に、

How low am I, thou painted maypole? speak;  
とある。こうした例からしても Shakespeare がこの戯曲を執筆した時に彼の故郷の May-day を念頭に置いたことは明瞭であると云い得よう。Shakespeare の頃の五月は前に述べ通り旧暦の五月であるが故に勿論夏である。斎藤勇博士の英詩概論に依れば、「イギリス人が普通春と云うのは二月半から五月半ばまで、夏はそれから八月半ばまで、秋はそれから十一月半ばまで、冬はそれから翌年二月半ばまでである。従つて我が國の彌生又は陽生三月と云う感じは五月にならなければ英国では味わえない。」とある。併しこれは新暦でのことであつて、当時の暦では3月25日から新年となり、四月の雨の季節が

過ぎていよいよ五月となると既に夏となつている。鳥達  
は Valentine's Day (新暦で2月14日) に雌雄活動を始  
める (IV, i, 42—43) と云われが、英国の田園の人々が  
活動を真に始めるのは五月からであり、樹木が緑を濃く  
し、cowslips を始めとして hawthorns や sweet briars  
など色々の草花が野山に乱れ咲くのは旧の五月である。  
そこで若い男女にとつても旧の五月は最も joyous sea-  
son であつた。英国では五月祭が太古から種々の形式で  
行われていた。その起源は Gothic 民族の遺風とも、  
Rome の花祭 (Floralia) の移植とも、又 Grece の  
Phallic rite とも、種々なる説があるが、ともかく英国  
の田舎では昔は盛大に行われたのである。五月朔日の朝  
は真夜中少し過ぎと云う程早く起きて、若い男女は何処  
か近くの森に音楽を奏し角笛を吹きならしながら出て行  
く、そして若葉の薫る樹の枝を折り、hawthorn などの  
花束や花環でその枝を飾り、戸口や窓辺や maypole を  
飾るために日の出前に帰つて来る。このことを going a-  
Maying と云う。maypole と云うのは黄と黒とで螺旋状  
にだんだんに塗つた柱で、花環やリボンや白色の燕尾旗  
で飾り立てられ、St. George の旗 (白地に赤の正十字  
形) を頂上に掲げて、盛土の上に樹立される。中には40  
フィートもある縦の柱で出来たものもあつた。若い男女  
はこの柱を囲んで、その下に May Queen を坐らせ、  
日の出頃から一日中夜まで歌を歌い踊り楽しむのであつ  
た。その歌は地方地方に依つて異つたが、滑稽なもの  
と神聖なものが奇妙に混合した一種異様な May-carols  
であり、踊りは morris dance と云つて、Spain から渡  
来した moor 踊りであつた。Shakespeare の故郷の  
Stratford-on-Avon の近くの農村にこの morris dance で  
有名な村があつたと伝えられている。この踊りの一座に  
は May Queen の外に Robin Hood を始めとして  
Maid Marian, Little John, Hobby Horse, 道化役など  
が配せられた。又 May-dew を集めてそれで顔を洗う  
と容貌がよくなるとも信じられていた。この様に May-  
day は実に楽しい日であつたので、

Pray, sir, be patient: 'tis as much impossible—  
Unless we sweep 'em from the door with cannons—  
To scatter 'em, as 'tis to make 'em sleep  
On May-day morning. (H. VIII, V, iv, 12—15)

と云われる程までに、人々はこの朝は朝寝坊することが  
不可能であつた。Tennyson の詩に、

You must wake and call me early, call me early,  
mother dear;

To-morrow 'ill be the happiest time of all the  
glad New-year;

Of all the glad New-year, mother, the maddest  
merriest day;

For I'm to be Queen o' the May, mother, I'm  
to be Queen o' the May.

とあり、子供達も前夜から待ち焦がれたのである。併し  
今日ではこの様な楽しい優雅な風習も時代の流れと共に  
英国に於ても流れ去り、maypole も樹立されることがな  
くなり、morris dance も姿を消し、May-day と云え  
ば殺風景な労働歌を叫びつゝ都大路を行く労働示威運動  
をする日と變つて了つた (1890年の Berlin 労働会議に  
始まる)。勿論英国に於ては新暦の五月一日頃は旧暦の  
五月一日の頃の様に野や森に草花も咲かず余寒が未だ残  
つて居る頃であり、又旧暦の様に正月が3月25日に始ま  
らなくなつて1月1日に始る様になつたので正月気分が  
なくなつたことにも依るのであろう。併し彼の頃はこの  
様に楽しい May-day は盛に行われていたのであつた  
から五月ともなれば彼が London の Blackfriars など  
に於ける自分の粗末な部屋の中で、郷里の妻子を偲び、  
懐しき古里の森や野や人々の上に想を走らせ、五月祭を  
思い出しながらこの戯曲を作り上げたのであろう。

此の戯曲は単一な source から彼が作り上げたのでは  
ない。今迄述べて来た所から明瞭であるが、主として英  
国の田舎に伝わる folklore とか迷信風習がこの劇の要  
素となつているが、筋及び性格創造などとしては Mon-  
temayor の Diana, Chaucer の Knight's Tale, Plu-  
tarch の Lives, Spenser の Faerie Queene, Grece  
の James IV, Ovid の Metamorphoses, 古い仏蘭西  
のロマンス Huon of Bordeaux などがその Sources  
として通常挙げられる。其等の sources のうち最もこの  
劇に影響のあつたと思われる Chaucer の Knight's Tale  
を見ると、

For May wole have no slogardrie a nyght,  
The sesoun priketh every gentil heite  
And maketh hym out of slepe to sterte,  
And seith, 'Arys, and do thyn óbservaunce.  
This maked Emelye have rémembraunce  
To doon honóur to May, and for to ryse. (1042—7)

と May-day の習慣に関係のある言葉があり、更に  
And Arcita, that is in the court roiál  
With Thesëus, his squier principal,  
Is risen, and looketh on the myrie day;

And for to doon his observance to May,  
Remembrynge on the poynt of his desir,  
He' on a courser, stertyng as the fir,  
Is riden into the feeldes hym to pleye,  
Out of the court, were it a myle or tweye;  
And to the grove of which that I yow tolde,  
By aventure, his wey he gan to holde,  
To maken hym a gerland of the greves,  
Were it of wodebynde, or hawethorn leves,  
And loude he song ageyn the sonne shene,  
Máy, with alle thy floures and thy grene,  
Wélcómé be thou, faire, fresshe May,  
In hope that I som grene gete may.'

(1497—1512)

とあつて、May-day の祭に関係がある。併しこの Arcita と Palamon とが森で闘つた日は、  
It fel that in the seventh yer, in May,  
The thridde nyght, as olde bookes seyn, (1462—3)  
とあり、即ち五月三日の夜に Palamon が牢獄から逃げ出して夜が明けたので森の中に隠れている、其処へ上に挙げた例に示す如く Arcita が observance to May をなすためにやつて来て彼と出逢う、そして Emelye に対する愛のためにその翌日森で闘うのであるから、五月五日の朝となる。その朝両者が激しく闘つて居る所へ、Theseus がその後の Ypolita 及び彼女の妹の Emelye 達を引連れて大鹿狩りに来て彼等が闘つて居るのを見出すと云うことになつている。Shakespeare の劇の方では Theseus がその後の Hippolyta 及び家来を引き連れて狩りに来て、四人の恋人達 Lysander, Demetrius, Hermia, Helena が Puck の徒で眠つて居るのを見出すのは五月一日の朝ということになつている。其故に Chaucer の *Knight's Tale* と Shakespeare の *A Midsummer-Night's Dream* とは四日間の差異があることになる。併し兩者とも五月の初めであることには変りない。

以上述べた通りこの劇の内容は四月の終りから五月一日にかけて起つた事件を扱つて居るのであるが、この戯曲の外題は *A May-Day-Night's Dream* とか *Summer-Night's Dream* と云う風になつておらず、*A Midsummer-Night's Dream* となつて居る。然らば *Midsummer-Night* とはいかなる夜であろうか、C. O. D. を見ると *midsummer* とは *period of summer solstice, about June 21; Midday, June 24, 1/4 a quarter-day.* と

ある。勿論これは新暦の計算に依つて居る。其故 *Midsummer-day* は日本での夏至(昨年は6月21日、今年は6月22日)に当る。其故に *Midsummer-Night* とは *Midsummer-day* の前夜即ち6月23日の夜である。*Midsummerday* は *St. John's Day* で、*Lady Day* (3月25日)、*Michaelmas* (9月29日)、*Christmas* (12月25日) と共に英国では四季交払日をなして居た。其前夜は *St. John's Eve* である。その日の朝は早くに緑の小枝を戸口に飾り、歓声を挙げる行事があつたと云われる。それは聖書の Luke Chap. 1 にある *St. John the Baptist* に関係のある行事であつた。この *St. John* の縁日である *St. John's Day* の前夜即ち *St. John's Eve* 或は *Midsummer-Night* には、田舎では大篝火を焚き、男女はその周囲で踊り、輿に乗じて火を飛び越える夏の夜の火祭が行われたと云われる。更にこの夜は人間の霊や妖精が出没するという迷信があり、又薬草がこの日に採集されたものが一番利目があると信ぜられていた。恰度日本に於て土用の丑の日に採集された薬草が一番効能がいゝと信ぜられているのに似ている。更に此の夜は教会の入口に断食をして一晩中目を醒して坐つて居ると、次の *St. John's Day* までの一年間に死ぬ予定になつて居る其教会区の人々の霊を眺めることが出来るとも信ぜられていた。其夜は徹夜をして見張りをして居れば、眠つて居る人々の霊を見る力が得られ、同時に妖精の彷徨うのも見られるとも考えられていた。この夜には薬草ばかりでなく超自然力を持つ植物を採集する習慣もあつた。こつそり人目につかず葉の上に種をつける羊歯もこの夜に取つたものはその偉力がすばらしく、これを用うるとその人の姿を他人から見えなくして歩くことが出来ると考えられていた。

We have the receipt of fern-seed, we walk invisible.

(I. Henry IV, II, i, 96)

の行はこの事を示すのであるが、更に *rose*, *St. John's wort*, *vervain* (馬鞭草), *trefoil* (白爪草), *rue* (芸香) などこつそりした魔性を持つ草としてこの夜に集められた。この劇に出る *love-in-idleness* と云う *philtre* (媚薬) になる草は、

Yet mark'd I where the bolt of Cupid fell :

It fell upon a little western flower,

Before milk-white, now purple with love's wound,  
And maidens call it love-in-idleness (II, i, 165-163)

とあるが、此の草の液を眠つて居る間に眼瞼に注がれると、醒めた時に最初に見たものに何であろうともすつか

り惚れ込んで了うと云う魔力を持つものである。この草も St. John's Eve に関係があるものと思われる。更にこの戯曲に出る

Be as thou wast wont to be;

(Touching her eyes with an herb

See as thou was wont to see:

Dian's bud o'er Cupid's flower

Hath such force and blessed power (IV, i 76-9)

とある Dian's bud と云う惚れをさます木の芽もやはり St. John's Eve に摘まれたのであらう。以上述べて来た所から略々推量が出来る様に、この劇で活躍する妖精や超自然性を持つ二つの葉は May-day より St. John's Eve 即ち Midsummer-Night により深い関係を持つものであると云うことが出来ると思う。この様な祭日に因んで Shakespeare はこの戯曲に *A Midsummer-Night's Dream* と外題をつけたと云う学者もある。

併しその様にこの戯曲の外題を簡単に片付けて了うわけにはいかないと思う。四月の終りから五月一日即ち May-day にかけての行事を含むと同時に 6月24日の Midsummer-day 特に23日の St. John's Eve に関する迷信や風習を含んで居るからである。其処で新旧両曆の差異から旧曆の May-day は新曆の Midsummer-day と一致するのであると主張する説が生ずるのは当然のことであらう。Clair M. Blunden 女史の如きはその一人である。

Midsummer's Day is June 24th. By the old calendar this was the middle of summer and also St. John's Day. On that night, the shortest of the year, the fairy world had a particular privilege of holding its revels in English woods and meadows. A Midsummer-Night's Dream means a kind of midsummer-madness caused by the moon at that time. The image of the moon runs through the play.

(Charles and Mary Lamb: Tales from Shakespeare. Notes. P. 153).

と述べて居られる。確かにこの引用の後半に述べて云うことは正しい。この劇には月に關する image が特に fairies に関連して繰返して出る。否現に月を表す言葉、*Obe. Ill met by moonlight, proud Titania. (II, i, 60)* とか、又 *Titania* の言葉、*And see our moonlight revels, go with us. (II, i, 141)* などからもこのことは立証出来る。併し妖精が出現するのは V, i, 370-1; IV, i, 97-8; V, i, 378-

397 などから夜の12時少し過ぎであつて、朝の雲雀の鳴き始める頃に退去するのであるから、この劇の冒頭にある五月一日の弓張月の新月は夕方暫時出現して間もなく没するのであつて、もし旧曆の May-day であるとするれば、妖精の出現する時は暗夜になつて居る筈である。其故に新月に関連する旧曆の May-day と妖精に関連の深い Midsummer's Day とは月の様相から云つても矛盾を感じないわけにはいかない。更に old calendar の 5月1日が新曆の 6月24日と一致するとするならば、新旧両曆の差は1ヶ月と24日と云うことになる。1952年度は旧曆では閏の5月があつたので、即ち5月が年に二回あつたので閏月の5月1日は新曆の6月22日であつた。併しこれととも毎年5月の閏月があると云うわけでもなく、又旧の5月1日が新の6月24日に一致した年に Shakespeare がこの戯曲をかいて、*A Midsummer-Night's Dream* と云う外題をつけたとも考えられない。この戯曲には May-day に関する風習と Midsummer-day に関する伝説習慣の両要素を含んでいて、必ずしも May-day と Midsummer's Day とは新旧曆の差異に依つて一致すると簡単に片付けるわけにはいかないと思われる。近頃は日本の Shakespeare 学者も Blunden 女史の説を奉ずる人があり、例えば柏倉俊三氏の如きは、「この事柄の起るのは、同じ四日間でも夏至のはじまり頃の四日間であり、」と云つて居られる。併しこの説には以上述べた理由に依つて従成するわけにはいかない。

然らば何故に *A Midsummer-Night's Dream* とこの戯曲を題したのであらうか。このことに就いて、岩波文庫、土居光知訳、夏の夜の夢の解説を見ると、「……確実なことは不明で、大体二つに分つことのできる臆説があるのみである。第一説によると、この劇はある有力な貴族の結婚式の余興として初めて演出されたもので、その結婚の時が六月二十四日頃であつたであらうとの説である。この説は劇の内容から見てもうなづかれるが、しかしシェイクスピアが恩顧をうけたエセツクス伯の結婚は一五九〇年でこの劇の書かれた時期としては早すぎ、サウザンプトン伯の結婚は一五九八年であつて、この劇にとつては稍遅すぎるが、この際改作補足されたのであらうとの説などがある。

第二説によると、聖ヨハネ祭の連夜には青年男女が藪に行き、花の枝を折り、或は薬草を求め、また蓬や花を採つて花環を作り恋人に贈るとか、幸福な結婚ができるか否かを占うとか、またこの夜に眠る者は魂が肉体から離れ、恍惚として迷い出で、その年内に死ぬる者は教会

堂を訪れ、その他の者も、種々の前兆を含んだ夢をみると信ぜられてゐた。この民間信仰はキリスト教よりも古い原始宗教に属するものであつて、中夏祭は地母神の祭りであり、植物の精である妖精が出現し、薬草は植物の最も盛な夏至の夜に、特別な効能をもつと信じられ、人々は祝火を焚き、清教徒が勢力を得た時代以前のメリー・イングランドに於いては、酒のみ、余興を催し、底抜け騒ぎをしたものやうである。シェイクスピアはかかる夜に相応しい夢幻劇として、この題名を与へたのであらうといふのである。この解説も前説に劣らず、この劇の内容と調和するやうである。

第一説の如くであると題名はどうでもよいことになるが、第二説の如くであると、かかる民間説話をもたぬ国の言葉に翻譯することは不可能になる。「ヨハネ祭述夜の夢」としても「夏至の夜の夢」としても上述の如き聯想は全く起らない。」とある。市河博士も大体同じ意見のようである。併しながら T. M. Parrott に依ると、

There seems reason to believe that this play was first performed during the festivities attending some noble wedding, possibly that of William Stanley, Earl of Derby, 25 January 1595. Stanley's brother, Ferdinand Lord Strange, had been the patron of Shakespeare's Company until his death in April 1594, and it seems likely that his former company would be asked to contribute to the celebration of his brother's wedding.

とあつて、貴族の結婚式の余興としてこの劇が最初に演ぜられたのであらうことは肯定しているようであるが、それがダービー伯の1月25日に行われた結婚式に演出されたので恐らくあらうと云つていのであるから、土居氏の第一説とは異なる。そして土居氏の認めて居られる如く、たとえ貴族の結婚式の余興として最初に演ぜられたのが6月23日の夜であつたとしても、それがこの劇の外題の有な理由と見ることは出来ないであらう。又この劇の構造上 background をなすと見做される Theseus Hippolyta theme や main plot をなす四人の恋人の筋即ち the episode of the love chain は May-day に明瞭に関係しているので、Midsummer-Night に夢みられた May-day 頃に起つた事柄の夢と解するならば一応はそれらは解決がつくであらうが、Midsummer-Night に一層関係の深い妖精達をしつくりと調和させるわけにはいかない。かく両要素を含む故に土居氏が第二説として述べられている説にも賛成は出来なくなる。

然らば如何にこの外題を考えるべきであらうか。一体この戯曲は大体から云つて三つの要素から成立していることが出来る。第一の要素とは Theseus を中心とした貴族の世界であつて、四人の恋人もこの世界の中に含まれ、その要素は当時の作家の風習に倣つてその story の源を旧来のものを踏襲したために五月の初めがその物語の時となつてゐる。第二の要素は fairy world と云う民間伝説迷信の世界である。その世界は St. John's Eve に非常に深い関係を持つてゐる。第三の要素は当時新興して来た商工階級の世界で、これはこの劇では clown world として表わされている。そして此等の融合調和し難き三つの世界が、第二の世界即ち fairy world を契機として融け合い、humorous な一種の pastoral 的な作品を形成している。併しながらこの Shakespeare の戯曲に於ては時ということに関する限りには未だ充分に融合を全くせず、矛盾を露呈していることは前述せる所から充分に理解される。彼は時に関しては恐らく無頓着であつたやうである。併しながらこの劇の事件が fairies と云う supernatural な存在と magical power を持つ herbs との魔力を契機として展開され統一されている如く、やはり mysterious power に富む St. John's Eve 即ち Midsummer-Night を契機として、吾々を現実と夢幻とロマンスとの錯綜せる世界に連れ去り、其処に英国の春夏秋冬中で最も美しく美しい旧暦での May-day 頃の自然と人の状景を展開してくれるものと解するわけにはいかないであらうか。そうしてこの契機となる夜をこの戯曲の外題として選んだのではないだらうか。たとえ Shakespeare が無意識的に直覺に依つてかく命名したとしても、この外題にこそ吾々は深い意味を見出すことが出来るのではないであらうか。この一年中で最も短い夜の夢、即ち *A Midsummer-Night's Dream* こそ人生の縮図ではないだらうか。懸命でやつてゐる吾々の営みも畢竟短き夜の夢に過ぎない。それを意識せず恋に血道をあげたり、威張つたり、醜態したりしてゐる。真に馬鹿なことだ。併しこの人間の愚行にこそ面白さがある。

What fools these mortals be. (III, ii, 115)

と Puck が云う。この気持は Shakespeare の気持であつたのであらう。この気持がこの外題の中に潜んで居ると云うことが出来るかも知れない。

更に Lysander が、

Or, if there were a sympathy in choice,  
War, death, or sickness did lay siege to it,

Making it momentary as a sound,  
 Swift as a shadow, short as any dream;  
 Brief as the lightning in the collied night,  
 That, in a spleen, unfold both heaven and earth,  
 And ere a man hath power to say 'Behold!'  
 The jaws of darkness do devour it up:  
 So quick bright things come to confusion.

(I, i, 141—149)

と云う言葉は、E. C. Pettet の説く如く、ロマンテックな恋愛感情や結婚理想化に対する Shakespeare の批判や疑問を表わして居り、恋愛のはかなさを示すものと見ることが出来るであろうが、同時にそれは人間のすべての此世に於ける営みに対する Shakespeare の考えの一端を示し、この戯曲の外題の意味を暗に表わしているとも解することが出来よう。

かく解することに依つて Shakespeare が彼の生涯の最後に到達した境地とも見做され得る Prospero の名言、

We are stuff

As dreams are made on, and our little life  
 Is rounded with sleep. (Tempest; IV, i, 156—8)  
 に連絡がつくものと思う。

(1953, 9, 9)

### 参 考 文 献

- (1) The Henry Irving Shakespeare, The Works of William Shakespeare, Vol 3. 及び Vol 14.
- (2) 研究社英文学叢書, 市河三喜註訳, Shakespeare: Midsummer-Night's Dream.
- (3) K. Deighton: A Midsummer-Night's Dream by William Shakespeare.
- (4) Thomas Marc Parrott: Shakespearean Comedy.
- (5) Clair M. Blunden: Charles and Mary Lamb, Tales from Shakespeare.
- (6) 中川芳太郎著: 英文学風物誌.
- (7) 柏倉俊三著: シェイクスピアとその周辺.
- (8) 斎藤勇著: シェイクスピア研究.
- (9) 斎藤勇: 英詩概論.
- (10) John Dover Wilson: Life in Shakespeare's England.
- (11) Shakespeare's England (Clarendon press, Oxford).
- (12) 岩波文庫土居光知訳: 夏の夜の夢.
- (13) 本田顕彰著: シェイクスピアの研究.
- (14) E. C. Pettet: Shakespeare and the Romance Tradition.
- (15) E. M. W. Tillyard: The Elizabethan World Picture.